

Скачков, Петр Емельявич

Очерки истории русского Китаеведения.

(スカチコフ著)

『ロシア中國學史概説』

松浦 茂

本書の著者である故スカチコフ氏(一八九二—一九六四)は、ソ連の中國學者である。晩年にロシア時代の中國學史に關して著書をまとめたが、不幸にして出版を待たずになくなった。このたび、氏の遺稿を整理して、それに死後發表された論文を補註に加えて刊行されたのが、これから紹介する『ロシア中國學史概説』である。

スカチコフ氏の名を不朽にしたのは、『中國關係文獻目錄』*Библиография Китая* (Москва-Ленинград, 1932, xxiv, 843 стр.; 改訂版 Москва, 1960, 691 стр.)である。これは、著者が三十年以上の歳月を費して完成した勞作で、過去二世紀半の間に出版した中國關係のロシア語文獻約二萬項目を收録している。著者の名は知らなくても、この文獻目錄の世話になったことがある人は多いことと思う。

ところで、『中國關係文獻目錄』は公刊された文獻しか對象にしていない。しかし、ロシア時代の研究には刊行されなかったものも多い。それらは學史的には重要であるが、文獻目錄からは除かれたのである。實は、スカチコフ氏はそれと並行して別に未刊の原稿についての目錄を作るといふ計畫をもっていて、そのために國內各地

にある古文書館を訪れて、關係資料を徹底的に調査していた。しかし、途中から考えが變わつて、中國學史に關する著書を書くことと決意した。こうしてできたのが本書である。

著者は本書を執筆するにあたって、公刊された著書、論文はもちろんのこと、新聞、雜誌から未刊の公文書や報告書、私信の類までありとあらゆる資料を涉獵している。特に最後の未刊資料の中には、スカチコフ氏が今度初めてその存在を明らかにしたのも多くある。本書で使われた資料は、質的にも量的にもこれまでの研究とは比較にならない。スカチコフ氏の著書によって、從來のロシア中國學史はまったく新しいものに書き換えられたと言っても過言でない。本書はロシア中國學史に關する、現在最もすぐれた研究書である。

ソ連の中國學は、我國では歐米の中國學ほど知られていない。そこで、本書を紹介するのをよい機會に、ロシアの中國學についてできるだけ詳しく述べてみたい。ただ限られた枚數で全體の内容を見ることがとうてい不可能であるので、研究史にしぼって中國學の發達をあとづけることにする。なお、わかりやすくするために順序を入れ換え、また解説を適宜に補つて説明をすすめていく。

本書の章構成は、次の通りである。

第一章 露清兩國の外交と通商關係の確立とロシア中國學の誕生

第二章 ロシアにおける科學的な中國學の形成

第三章 ロシア中國學の「ビチューリン時代」

第四章 北京傳道團から大學へ

第五章 ワシリエフと國民的な中國學機關の成立

第六章 十九世紀と二十世紀の交代期

この前後に、まえがきと結論、註、それに附録四篇が附いている。

最初の二章では、十八世紀のロシアで、逆境の中に中國研究が始まったことが述べられる。十八世紀の中國研究についてはこれまでわからない點が多かったが、それをみごとに明らかにしたこの二章は、本書のうちでも特に價值が高い。

一七二五年に科學アカデミーは言語學者のバイエルを東洋諸言語の教授として招聘した。彼は中國語も研究していたが、高慢な性格で後繼者を育てることもなく、ロシアの中國學に對していかなる影響も残さなかった。

中國研究の歴史に決定的な役割を演じたのは、ロシア北京傳道團である。一七一五年（康熙五四）にロシア政府は、その頃北京に住んでいたロシア人捕虜（アルバジン人）の要請を容れて、彼らに布教をするという名目でギリシア正教の聖職者十人を中國に派遣する。そして十二年後の一七二七年（雍正五）にはキャフタ條約を結んで、第五條でロシア人聖職者を北京に常駐させることが正式に認められた。これが北京傳道團の始まりである。傳道團は中國に對するロシアのたった一つの窓口であったから、本來の宗教的な義務の外に、非宗教的な活動も行なった。第五條では同時に、滿洲語と中國語の通譯を養成するために、傳道團の中に生徒を参加させることも認められた。十八世紀の中國研究になったのは、すべて傳道團の生徒として北京で勉強した人々である。

中國研究の基礎を築いたロッソーン・ヒン *Россохин, Илларион*

Калинович（一七二一—一七六二）は、第二回傳道團（一七二九—一三五）の生徒である。北京ではまじめな勉強ぶりを買われて、三年より理藩院で通譯を勤めた。四一年に歸國してからは科學アカデミーに所屬して、滿洲語と中國語の翻譯にあたっていた。彼はまた、アカデミーの仕事とは別に中國の史書をロシア語に翻譯した。

例えば、『親征平定朔漠方略』（一七五〇）や『資治通鑑綱目』（一七五六）、『八旗通志』（一七八四刊）、『異域錄』（一七六四刊）等を滿洲語から翻譯している。しかし、アカデミーを牛耳っていたドイツ系の學者が、ロッソーン・ヒンの翻譯は本務から逸脱したものであるとして、出版することを妨害したので、ただ『八旗通志』と『異域錄』の譯だけが死後に出版されたのである。ロッソーン・ヒンは、生前はまったく評價されず不遇のうちになくなった。中國學者として彼の名が知られるようになったのは、十九世紀の半ばになってからである。

レオンチーフ *Леонтьев, Алексей Леонтьевич*（一七一六—一七八六）は、初め三九年からモスクワで中國人教師ジョウ・ゲについて滿洲語と中國語の基礎を學んだ後、四三年に北京へ行って傳道團の生徒に加わり勉強を續けた。五五年にロシアに戻り、翌年から翻譯官として外務參議會で勤務する。ここでは、清との間で交換する外交文書の翻譯が主な仕事であったが、五七年からはアカデミーに出席して、ロッソーン・ヒンを助けて『八旗通志』の翻譯を完成した（一七六二）。レオンチーフが活潑に翻譯を始めるのは七〇年以降で、それからなくなるまでに二十餘りの仕事を發表している。主なものを挙げると、『大學』（一七八〇）、『異域錄』（一七八二）、『大清會典』（一七八一—一八三）、『中庸』（一七八四）等がある（『異域

録」と『大清會典』は滿洲語からのロシア語譯。彼の翻譯は數も多く、主題もさまざまである。だが、そのことは決してレオンチュフ個人の好みや偶然のせいではない。當時ペテルブルグの貴族の間には、ヨーロッパで大流行した中國趣味が廣がっていた。彼らは中國の制度や文化の中に絕對主義の典型を見て、そこからロシアの現實に對する教訓を導こうとした。レオンチュフの仕事はこうした意圖をもっている。當時これだけ多くの著書を出版することができたのも貴族の支持があつたからである。

以上でわかるように、彼らの仕事はほとんどが漢籍の翻譯、それも滿洲語からの重譯である。これは研究と呼ぶには適當でないかもしれない。しかし、彼らをとりまいた當時の事情を考えれば、これはやむをえないと思う（各々については今後適宜ふれていく）。同時にまた、當時の社會もそれ以外のものを期待してはいなかったのである。十八世紀のロシアでは絕對主義國家をめざして國づくりが急がれていた。そのために實用主義的な學問研究が重視された。政府は西歐諸國に留學生をさかんに送り込んだが、彼らは基礎的な理論よりも實際的な知識を學ぶことを奨励された。北京傳道團の場合にしても、そもそも生徒を加えた理由は、中國語と滿洲語を勉強して、將來外交文書や書籍を翻譯させるためであつて、中國を學問的に研究しようというのではなかった。結局、彼らの翻譯は翻譯官としての仕事であつて、その範圍を出るものではない。

ここで、主題からは少し横にそれるが、後段との關係から、十八世紀の北京傳道團について問題點を述べてみたい。從來、傳道團の内部で怠惰と飲酒の惡弊がはびこつていたことはよく知られている。また、一部には北京市民に亂暴をはたらくものまでいたと言わ

れる。彼らの行爲を正當化するつもりは毛頭ないが、しかし、一方的に彼らだけを斷罪することは妥當ではない。私には、彼らもまた專制政治の犠牲者のように思える。

一體、北京傳道團という制度は、極めて非人間的な面をもっている。明確な目標や方針を示されず、満足な援助も與えられないで、十年近くも中國で過さねばならなかった。そのうえ傳道團の生活環境は極めて劣惡であつた。そのために團員が病氣になつても、醫師がいなくて治療を受けることができなくて、傳道團の死亡率は恐ろしく高かつた。このような過酷な現實に對して、團員は不安をつのらせていた。彼らはいろいろな理由をつけて中國行きに抵抗した。そして北京に着いてもひたすら交替をまつて、すさんだ生活を送つたのである。

中國學にとって、十八世紀は苦難の時代であつたと言えるだろう。

續く二章では、十九世紀前半に北京傳道團が改革されて、その結果中國學が著しく進歩したことが語られる。

第九回傳道團（一八〇七—一二）の規律の亂れは、もはや小手先の處置ではどうすることもできなかった。ロシア政府は傳道團のこうした現状に強い危機感をいだき、根本的な改革が必要であることを痛感し始めた。一八一八年に政府は第十回傳道團（一八一—一三〇）に關して法令を制定した。これには、ロシアを出發して北京に到着するまでの規則と、北京での義務が具體的に決められていた。そのうち、傳道團の研究活動については、科學アカデミーが中心になつて計畫を立てた。それによると、團長は中國語か滿洲語のどちらかを勉強すればよいが、一般の團員は佛教と道教を研究し、そ

の經典を翻譯しなければならなかった。これに對して、學生は中國語と滿洲語を學習することが義務となっていたが、それ以外に各自の希望や能力に應じて、人文・社會系だけでなく自然系の研究をすることも認められた。ロシアの學術機關や學會は、學生達に準會員の資格を與えて、彼らが中國で行なった研究や觀測の結果を提出させることにした。

これ以後傳道團の規律は目に見えて良くなった。生活條件はかなり改善され、さらに醫師が傳道團に隨行するようになったので、異常に多かった死亡者も激減した。またこれまでは神學校の生徒や修道院附屬の語學學校の生徒が傳道團の生徒に選ばれることが多かったが、しだいに彼らに代つて高等教育を受けたものが學生に選ばれるようになった。

長年の懸案であつた出發前の準備教育も、第十二回傳道團（一八四〇—四九）のときから實施されるようになった。一八三九年八月から十一月まで週五日、一日五時間半、ビチューリンとリポフツォフが全員に對して中國語と滿洲語を教えている。

十九世紀前半の最も偉大な中國學者は、ビチューリン *Бичурин*, *Никита Яковлевич (Макинф)* (一七三七—一八五三) である。ビチューリンは第九回傳道團の團長として中國へ行つたが、滿洲語にはオリジナルな文獻はほとんどない見切りをつけて、北京ではもっぱら中國語を勉強した。それまでロシアには中國語の辭典や文法書が一冊もなかったので、まず生きた口語を基礎にした辭典を作ろうと考えて、中國人に變裝して定期市等に出かけ、そこに集まる人々の話す言葉採集した。現在八種類、辭典が原稿で残っていると言う。歸國の時期がせまると、ビチューリンは北京でもっと勉強

がしたいと宗務院に訴えて滞在を延長してもらつた。二二年にベテルブルグに歸るとすぐ、北京での責任を問われて告訴される。そして裁判の結果、バラム修道院に終身幽閉するという判決を受けたが、幸にして友人の熱心な嘆願運動のおかげで、三年間で釋放されることができた。自由の身になったビチューリンは、憑かれたように仕事にうちこむ。二六年から三四年までの間に著書だけでも八點を發表しているが、それらはいずれも修道院で準備していたと言われる。大部分はチベットやモンゴル、ジュンガル等といった塞外の民族史に關するもので、『漢書』『元史』から『資治通鑑綱目』『西域同文志』『西域聞見錄』『衛藏圖識』等に至るまで、その關係部分を抄譯したのである。晩年には『古代中央アジア諸民族資料集』（一八五一刊）を作つた。ビチューリンの功績は、漢籍を翻譯して資料集にまとめ、中國と塞外の民族に關する正しい知識を與えたことである。なお、一八三五年に出版された彼の『中國語文法』は、ロシア中國學史上劃期的な著作となつた。これはカザン大學とベテルブルグ大學で教科書として採用されている。

カファロフ *Кафаров, Пётр Иванович (Паладий)* (一八一七—一八七八) は、第十二回と第十三回傳道團（一八五〇—五八）の二回にわたつて中國へ行つた。特に後者では團長を勤めている。カファロフはいろいろな方面に業績を残したが、有名なのはモンゴル史の研究である。『元朝秘史』（『永樂大典』本）等を翻譯して膨大な註を附けた。また、彼は『中露辭典』を完成していたが、それは死後にポポフによつて北京で出版された（一八八八）。この外カファロフは『ロシア北京傳道團研究紀要』（一八五二—六六）を發行する際に中心的な役割を果している。この中には獨創的な論文も

含まれている。

十九世紀前半に行われた傳道團の改革は、彼らの研究にしたいに効果をあらわし始めた。相變わらずまだ翻譯が多かったが、内容は格段に充實した。滿洲語の翻譯に代って中國語の原典を利用するようになり、中國學は大きな飛躍をとげる。十八世紀の學者は中國語よりも滿洲語の方がよくできたが、この頃になると滿洲語はほとんど死語と化して研究をする意味がなくなってしまう。これに對して、中國語の方は學習上の障害が少しずつ除かれていく。まず、三〇年代に入ってビチューリンの中國語文法が出たり、またポルトガルの宣教師で最後まで北京に残っていたベレイラがなくなり、一時的に北京傳道團が彼らの藏書を保管することになって、中國語の參考書がようやくととのつた。さらに、傳道團の費用で中國人教師を雇って、彼らから中國語を學ぶようになった。このような好條件にめぐまれて、傳道團の語學力は著しく向上する。こうして、文獻學に基礎をおくロシア中國學の傳統がうまれたのである。

最後の二章では、大學における中國研究が述べられる。

東洋諸國との關係が發展するにつれて、ロシアでは十八世紀以來たびたび大學で東洋學を研究することの必要性が叫ばれていた。カザン大學は早くも一八〇七年からアラビア語・ペルシア語とトルコ語・タタール語、そしてモンゴル語の三講座を設置し、その後三十七年には中國語講座も開設して、東洋學の中心となった。ところが、東洋學部は勉強が困難であることと就職難がわざわざして學生數が激減し、たちまちゆきづまってしまった。これに對して政府は、ペテルブルグ大學に東洋學部を新設して、それにカザン大學の東洋學部と國內に分散していた幾つかの關係機關を統合することを決定し

た。こうして五五年にカザン大學の東洋學部は廢止されて、教官と學生は藏書とともにそっくりペテルブルグ大學に移って行った。これから後ペテルブルグ大學の東洋學部が世界の東洋學の發展に大きな役割を果たしたことは、周知の通りである。

カザン大學にしてもペテルブルグ大學にしても、最初はいずれも北京傳道團の出身者が中國語學科の教授陣を固めた。その中で教育と研究の兩面で大きな業績を残した人物は、ワシリエフ Васьков, Василий Павлович (一八一八—一九〇〇) である。彼は三十七年にカザン大學を卒業した後、第十二回傳道團に入って四〇年から四九年まで北京に滞在した。歸國してすぐ一年からカザン大學で中國語と滿洲語の助教授を勤めていたが、東洋學部の廢止によって五五年にペテルブルグ大學に移り、改めて中國語學科の主任に任命された。ペテルブルグ大學では中國語と滿洲語を擔當した外に、中國史や中國文學も講義した。ワシリエフがまさきにとりかかった仕事は、語學の參考書を作ることであつた。最初、學生が利用できる參考書と言えば、わずかにビチューリンとレミューザの中國語の文法があるくらいで、あとはもっぱら講義ノート勉強するしかなかった。教材の不足がこれまで學習の甚しい支障となつていたので、ワシリエフは中國語と滿洲語の兩方について各々辭典と例文集を作つて學生に與えた。これらの參考書は以後長く中國學の入門書となつたのである。一方、研究者としては、中國の宗教、中でも佛教の研究が有名である。發表した論文は多くないが、三九年に提出した博士論文以來、彼の著書、論文の大部分は佛教關係のものである。ワシリエフがすぐれているのは、漢籍だけでなくチベット語文獻からも材料を集めた點にある。ワシリエフの同僚には、ザハロフ、スカ

チコフ、ベシシュロフ等がいる。いずれも國內で高等教育を終つてから北京へ行つて、中國學の勉強をして歸つてきた人々である。彼らの努力によつて中國語學科の基礎が築かれたのである。

ワシリエフは退官するまで三十八年間ベテルブルグ大學で教鞭をとつたが、在職中に全部で六十數名の學生が中國語學科を卒業した。大半は外交官等のポストを得て就職していったが、そのうち幾人かは大學に残つて中國學者になつた。八〇年代に入ると、彼らの中から先輩の後を繼いで大學の教壇に立つものがあらわれた。この新しい世代を代表するのは、ゲオルギエフスキー Георгіевскій, Семенъ Михайлович (一八五一—一八九三)である。八〇年に中國語學科を卒業すると中國へ渡り、その後八五年からベテルブルグ大學で講義を受けもつようになった。彼は深い教養をもつた一級の人物で、理論的な諸問題について進歩的な發言をした。ゲオルギエフスキーの儒教に関する研究は價值が高いと言ふ。新しい世代に屬する教官としては、ゲオルギエフスキー以外にイワノフスキー、ポポフがいる。

ところで、一八九九年にウラジオストクに東洋研究所が開設される。東洋研究所は、滿洲(現在の中國東北地區)に對するロシアの侵略政策に關聯して、將來この地域で實務につく人材を養成する目的をもつていた。そのために外國語(東アジアの諸言語)教育が重視されて、中國語が必修となつた。中國學關係の教科は、ベテルブルグ大學出身のシュミットとルダコフが擔當したが、彼らは短期間にすぐれた教科書を幾種も著した。それらはやがてベテルブルグ大學でも教科書に採用された。

その後ベテルブルグ大學では中國語學科の教官が相繼いでなくな

り、二十世紀初めには中國語學科は一時的に沈滞する。やがて、中國語學科の卒業生でその後西歐と中國に留學していたイワノフとアレクセーエフが歸つてきた。二人は、西歐の新しい教育方法としっかりした中國語の會話力を身につけていた。彼らによつて中國語學科のカリキュラムは大幅に改良されたのである。

ロシア中國學は、十九世紀後半にヨーロッパに追いついた。

以上、簡單ではあるが、研究史を中心にしてロシアの中國學史をまとめてみた。

枚數の關係から、本文では各々の研究を個別的にとりあげるといふことができなかった。大部分は既に歴史的なものとなつてしまつたから、それでもよいのであるが、しかし、今日なお生命を失なつていない研究もある。本文をしめくくるにあたって、最後にこの點について少しばかり補つてみたい。

前述したように、初期においては原典の翻譯がほとんどであつた。この中には重要なものもあるが、特殊な翻譯でないかぎり、我々にはそれほど必要性のあるものではない。これに對して十九世紀の中國學は、研究態勢が一應ととのい、學者にも人材を得るようになって、注目すべき研究を生んでゐる。そのうち、今日の我々にとつても大いに興味をひくのは、當時の中國に關する情報を含んでゐるものや、中國での實地研究にもとづくものである。中國に滞在していたロシア人が書いた各種報告書や日記、私信の類は、中國を知るための有力な資料であるし、また、ザハロフの『滿露辭典』等は、實際の體驗をもたない文獻だけの研究では絶対に書けないものであ

る。こうした文獻は、どの國の中國學ももっていないロシアだけのものである。これらは大變な數に達すると思うが、ここでは、一例としてスカチコフの場合についてさらに詳しく見てみたい。

スカチコフ Скачков, Константин Андреевич (一八二一—一八八三) は、第十三回傳道團 (一八五〇—一八五八) の學生に加わって中國へ行った。彼の任務は磁氣と氣象の觀測をしてデータを本國に送ることであつたが、その餘暇に中國農業について熱心に研究した。初めは『授時通考』等の農書を翻譯していたが、そのうち机上の勉強だけではあきたりなくなつて、自分で犁を操作して作業の能率を調べたり、穀類と野菜について實驗的にいろいろな品種を播種して結果を比較したりした。また、北京の郊外へ出かけて農民の生活を實地に調査して、彼らの年中行事、習慣等から小作料や家計の收支に至るまで詳細に記録している (未刊)。スカチコフの記録が、中國農業に關する貴重な研究であることは明らかである。一刻も早い出版が望まれる。さらに、太平天国の亂が激しかった頃の騒然とした北京のようすについてもいろいろと記録を残している。こちらの方は既に一九五八年に出版されているので、我國でも見ることができる。

この種のロシア語文獻は、十九世紀の、しかも外國人が書いたという點で、確かに限界をもっている。だがそれは、漢文資料とは別の獨自の價值をもった資料なのであつて、今後の研究が大いに期待される。

本書を紹介するにあたって、多くの誤解や誤讀を犯していることと思う。それはすべて私の責任であつて、著者並びに讀者に對して御容赦をお願いしたい。本文について、御叱正と御教示を賜われ

幸いである。

註

- ① 木崎良平『ピーター大帝』(清水書院、一九七二) 一八二—一八四頁等参照。
- ② 一七一五年から一八六四年までに全部で一四回の傳道團が派遣されたが、本書の附録三(三五八—三六一頁)に掲載されている名簿によれば、北京で客死した團員の總數は、四一名(全團員數一五七名)にものぼる。第一回から順に挙げると、五(一五)、三(一九)、六(二四)、一(一九)、五(一九)、三(二〇)、六(二〇)、四(二二)、二(二二)、零(二二)、一(二四)、零(二二)、四(二二)、一(二二)となる(括弧内は全團員數を示す。この中には監督官等も含む)。これから明らかのように、第九回傳道團までの死亡率は非常に高く、平均三五・四%になる。
- ③ 本書には見えないが、一八二〇年に傳道團の經費が年六、五〇〇ルーブルから一六、二五〇ルーブルに増額されたことを述べる著書もある。中國社會科學院近代史研究所『沙俄侵華史』(第一卷)(北京、一九七八)二八三頁参照。
- ④ 註②参照。第十回傳道團からは死亡者がほとんどいなくなる。
- ⑤ 最初、理藩院から傳道團のところに教師が派遣されるはずになつてしたが、報酬がなかったこともあり、彼らは月に數回しか顔をみせなかった。

Москва, Hayka, 1977, 22 cm, 504 стр.